

【おぼろげ】

若い教師で、仕事ができないと悩み、やめたくな
る人が多くいます。「新人」が仕事ができなくて自信
をなくしている状況は今日、教師に限らず一般的だ
そうです。新社会人を社会全体でねぎらうことがと
ても大切です。

若い教師は若いだけで、子どもに好かれ
ることはよくあり、ベテランのうらやむと
ころです。教育の場合、若い教師の「でき
ていないこと」は、それが「子どもたちの
出番」になるのが奥深いところです。

不明確な指示は、どうするのか自分で状
況判断することが求められるし、発問のへ
たさは、何を考えればいいのか、子どもた
ちの問題意識を発動させます。板書のま
ちがいやわかりにくさも、子どもたちに、なぜま
ちがいがあるのか、なぜわかりにくいのかを考え、
「教育を受け取る力」を育みます。へんに「上手」な技
術を積んでしまうと、子どもたちの主体性を覆い隠
していくことになりかねません。

生活教育 キーワード

教師の指導の欠点をあげつらうだけでなく、「うま
くいかなかった」とき、子どもたちがどう動いたか
何をしたかを子どもの姿で指摘することが教師支援
への第一歩になります。

「ぼくらの歩む足の下には／露のとうの芽ののびる
声は絶えない／ぼくらの立つ 大地の下の
盤石を叩き割る／細き根の歌は高まる」(深
沢義曼)

暗闇の中でも伸びる芽に「気づかなかつ
た」ことに気づいたとき、自分のヘタさを
身にしみて感じ、教師の自己変革という厳
しい道を歩み始めるのかもしれない。

(研究部・加藤聡一)

参考文献

- ① 中野光・深沢義曼編著『教師誕生の記 すべては今か
ら』新評論、一九七〇年。二七〇ページ。
- ② 春日井敏之「思春期のゆらぎと不登校支援 子ども・親・教師の
つながり方」ミネルヴァ書房、二〇〇八年。(劣い)を押し出す。
- ③ ハイテガール(熊野純彦訳)『存在と時間(二)』(岩波文庫)岩波書店
二〇一三年(原書一九二七年)。特に第四十二節。Someをねぎ
らいと訳すとまた世界が違って見えます。